

**ヤリチンで  
モテモテプレイボーイの  
巨根大学生カズトが送った  
セックス尽くしの一日  
射精回数全26回！！  
第3話**

「あの、カズトくん・・・」

「んっ？・・・あ、リミナさん、何ですか？」

「あのね・・・娘のリンがね・・・もうどうしようもないくらい、あなたのおちんちんが見たいって言って聞かないのよ」

啞然としたカズト。

予想の欠片にもなかった言葉だった。

すぐさま理由を尋ねると・・・。

「あの子あなたのね・・・ああ、こんなことイイ年したあたしが言うのすっごく恥ずかしいんだけど・・・水着あるでしょ？」

無言で頷くカズト。

「いつもね、すっごいモッコリっていうの？盛り上がってるじゃない??」

カズトは目をパチクリさせる。

言われてみれば・・・。

もう当たり前すぎて意識することすらなかった。

○校の時はその形やサイズにも悩んだりした。

だけどひたすらセックスのための道具として定着してしまっている現在のヤリチン大学生活では、自らのペニスを客観視する機会すらなく、無意識に忘れていたのだ。

しかし・・・。

カズトはとてつもない“巨根”の持ち主。

大家さんの奥さんと、そして大学の女友達と、更には街で声をかけ知り合ったセックスフレンドと、そしてもちろん愛する恋人と。

日々セックスに明け暮れ、夢中でそのヤリチンライフを楽しんでいるカズトのペニスが成長しないはずはなかった。

使い続けて巨大になった肉棒という道具でもって、更にセックスに励む。ひたすらその繰り返しを送っていた。

もはや本人は意識する暇すらなかったけれど、傍から見ればカズトの股間は実に強烈な印象を外部に与えるという事実があったのである。

そう・・・それが〇〇であったとしても・・・。

「そ、そうですね・・・考えたこともなかったけど。リンちゃんびっくりしちゃったのかな・・・」

「ダメよねえあの子、とにかく小さなことにとことん興味津々の子だから。だけどまだ〇歳よ。もちろん“そういう”気持ちで言ってるんじゃないのは分かるわよね？子供の無邪気な好奇心だけなの」

「も、もちろん、それは分かってますけど・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

40秒ばかり、カズトは上半身裸の水着姿のまま軽く腕組みして考えた。

そして決心したようにリミナに告げた。

「いいですよ！！そんな〇さな女の子にこれ見せるだなんてなんだか逆に恥ずかしいけど・・・身近すぎて向き合う機会なんて最近めっきりなかったから・・・良い機会かもです」

カズトはそう言って、ブリーフ型競泳水着の中央部分の、山のようになって太長い勃起前のペニスの“形”すら浮き彫りになっている窮屈そうな股間を指さした。

**体験版はここまでです**  
もし気に入っていただけましたら、  
**続きを製品版で楽しんでいただければ幸いです**